

# 会 議 録

会議名 (審議会等名)	令和6年度 第1回キャリア教育推進委員会		
事務局 (担当課)	学校教育課 電話042-769-8284 (直通)		
開催日時	令和6年5月24日(金) 15:00~17:00		
開催場所	ウェルネスさがみはら 7階 視聴覚室		
出席者	委員	20人(別紙のとおり)	
	その他		
	事務局	8人 学校教育課 6人 教育センター 2人	
公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可	傍聴者数	1人
議題	1 確認事項 (1) 本市のキャリア教育について (2) 令和6年度キャリア教育について (3) 令和6年度の方向性について  2 協議 「本市のキャリア教育に期待することと未来を切り拓く力を育むためにできること」		

# 議 事 の 要 旨

[議事内容、質問及び主な意見]

●委員 ○事務局 □司会

## 1 開会

### (1) 学校教育部長あいさつ

市内の小学校中学校、義務教育学校は、修学旅行が始まっており、小学校は本日9校が栃木県日光方面に、中学校は7校が京都奈良方面へ行っている。中学校は、学校によっては、広島まで行っているところや東北方面を予定している学校がある。小学校では先週、すでに3校が運動会を実施しており、今週末には9校が予定しているところである。運動会実施の時期としては、春頃の実施から11月上旬までの実施が予定されており、暑さ対策などに配慮し、年間の教育計画を作成していて、各学校の工夫や苦勞が感じられる。

修学旅行や運動会等は、子どもたちにとって大変大きな楽しい行事であり、各学校においては、事前学習や事後学習を大切にするとともに、子どもの主体的な取組を重視し、何をやるのかだけでなく、何を学ぶのか、何を身につけさせるのか等、ねらいを明確にし、「キャリア・パスポート」等も活用しながら取り組んでいるということ、様々な機会に、各校の校長から聞いているところである。

本市では、第二次相模原市教育振興計画において、「共に認め合い、現在と未来を創る人」を目指す人間像とし、「温かさと先進性のある教育の推進」等、三つの基本姿勢のもと、教育施策を展開している。キャリア教育の推進については、この振興計画「基本方針I 目標1 未来を切り拓く力の育成」の筆頭の施策に位置付けており、現在、各学校においては、教育活動全体を通じて、社会的職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育てている。

今年度も本市におけるキャリア教育の推進の方向性として、小中9年間の学びの連続性を重視する「縦の接続」、学校と地域の連携協働を推進する「横の連携」、この二つの方向性に基づき、子どもたちのために何ができるのか、何をすべきか、という思いを共有しながら、改善・充実を図っていきたいと考えている。

これまでと同様に、藤田教授、原教授をはじめ、関係団体、関係各課から出席いただいている委員の皆様から、忌憚のないご意見をいただき、令和6年度本市キャリア教育の推進につながる、充実した会にしたいと考えている。

### (2) 委員の自己紹介

## 2 確認事項

- (1) 本市のキャリア教育について
- (2) 令和6年度キャリア教育について
- (3) 令和6年度の方向性について

○資料について事務局から説明

[質問・意見等]

- 中村委員 保護者の代表という立場でお礼を伝えたい。子どもたちのために、継続的に審議を重ねていただいていることに感謝している。引き続き、力を貸していただきたいと思っている。

## 3 協 議

□農上委員 キャリア教育に係るこれまでの成果と課題について伺う。職業的、社会的自立を果たすために必要な力を育むことがキャリア教育の目指すところであるが、委員のそれぞれの立場から見た成果と課題をどのように感じているか、まずは、この視点で協議を進めたい。

産業支援・企業誘致推進課の千葉委員、相模原のアントレプレナー体験の取組について、成果と課題等についてはいかがか。

- 千葉委員 創業支援・企業誘致推進課は、本年度よりこの会議に参加している。子どもアント

レプレナー体験事業については、夏休みに小学校5・6年生を対象に行っており、昨年は、市内の様々な学校から50名弱の児童の参加があった。この取組は、20年ほど継続しており、毎年多くの児童が参加している。会社の起業と経営のプロセスを学ぶことを通して、子どもの頃から社会の仕組みなどを知り、起業家の精神を育むことが目的である。大学生や経営者の方々に協力をいただきながら、自分たちで企画をする、販売をするといった一連のプロセスの体験を通して、コミュニケーション力などのキャリア教育でめざす力を育むことができる事業だと考えている。

ボランティアとして携わった大学生の中には、自分自身が小学生の頃にこの事業に参加し、その時に教えてくれた大学生に憧れ、携わりたいという思いから参加してくれている方が多くいる。また、市内の経営者の方も、子どもたちが小学生の頃から社会の仕組みや職業について考えるきっかけを作りたいという思いで参加してくださっていることは大きな成果である。他にも起業家を育成する事業を行っているが、このような事業に参加されている方など、もっと様々な方に広く参加していただけるような企画を、今後、考えていきたい。

□農上委員 これに関連して、地域企業との交流機会促進事業について、産業支援・雇用対策課の取組はいかがか。

●草薙委員 本年度、新規事業として、中高生と地域企業との交流促進事業を立ち上げた。この事業は、市内企業の方に参加いただき、中学生、高校生に対して会社の概要や取組紹介などを行う交流イベントである。

昨年度は、2月に産業会館で実施し、市内企業9社が参加した。会場への来場者（参加者）は、114名に加え、オンライン115名の参加があった。子どもたちにとって、企業活動を知ることは、世の中にたくさんの職業があることを知ることなど、社会を知る学びにつながる。このことで、職業選択の際の選択肢が増えることにつながることを望んでいる。

こうした取組が、将来の夢や目標をもつことにつながることを期待しており、この事業に参加した子どもたちの感想としては、「将来を考えるきっかけとなった。」、「いろいろな仕事や企業を見て、自分の視野が広がった。」、「自分のやりたい仕事が増えた。」などがあった。もっと多くの人に参加してもらいたいため、実施時期を2月から11～12月に変更することを考えている。

□農上委員 発表いただいた2つの事業と同じような取組をされている機関はあるか。

●馬渡委員 子どもの居場所創設サポート事業について、子ども食堂や無料学習支援の取組を社会福祉協議会に委託して行っている。キャリア教育で育みたい力としては、「つながる力」であり、地域の方の多様な価値観にふれる場や多様な年代の方と接する機会を提供するものとして捉えている。

今年の3月現在で、子ども食堂は52団体、無料学習支援は39団体となっている。コロナによる影響で一時減っていたが、回復してきている。

課題としては、地域の高齢化に伴う担い手不足が挙げられるが、大学生に加わってもらうなどの対応をしている。また、子ども食堂に参加してほしい子どもたちが参加していない状況があり、この取組の情報が届いているのかが分からないところがある。小学校、中学校においては、チラシを配布するなどの協力をいただきたい。地域によっては、民生委員が中心となり、その地域の小学生や中学生が子ども食堂の清掃活動に携わる取組があるので、このような取組を広げることが「つながる力」の育成につながると考えている。

□農上委員 障害者に関わりのあるイベントへの児童生徒への参加の状況について伺う。

●沼田委員 多様性への理解ということについて、障害等に関する理解促進を目指し、事業を行っている。昨年度は、「心の輪を広げる体験作文」、「障害者週間のポスター」の応募があり、選考・表彰を行った。作文の中には特別支援学校との交流会のことを取り上げたものなどがあり、障害に対する理解が進んだものと考えている。

課題としては、このような取組を行う学校に偏りがあることである。幅広くこのような活

動に取り組んでもらいたい。

□農上委員 4名の委員の方に、それぞれ具体的な取組、成果と課題をお話しいただいたが、学校の活動とのつながりについて、いかがか。

●松尾委員 このように推進委員会が開かれ、これほど多くの方に支えられているということ、まだ、職員や生徒、保護者の方が知らないかもしれないと感じるが、これはもったいないことである。本来であれば、私たち教職員はもっとたくさんの方を勉強し、今の時代にマッチするような教育をしていかなければいけないと思う。そのような中で、相模原市が考えた4つの力、「つながる力」、「自律する力」、「乗り越える力」、「見通す力」については、かなり浸透したと考えている。この4つの短いキーワードは、先生方のつながりを築くきっかけとなっており、上溝南中学校区であれば、「つながる力」を重点に教育をしようということになっており、このような認識を共通してもっていることは、成果である。

一方、「つながる」という意味では、同質の集団であるクラスの友達を大事にしようという意味合いが強くイメージされているため、実は世の中にはもっとたくさんの方が広がっているということに、児童生徒が気付いたらよいと思う。今後、もっと世界が広がっていくように、外部の講師などをお招きできたらと思ったところである。

●佐藤委員 本校は、音楽の研究を30年以上にわたり行っているが、この研究の中にキャリア教育を取り入れて進めている。本年度は、音楽の技能を高めるだけでなく、「なりたい自分になるために」ということをテーマとしている。

相模原市では、各中学校区において、小学校から中学校までの9年間を見通し、子どもたちを育てていくことを大切にしている。具体的には、校長同士が頻りに連絡を取り、情報共有をしていることに加え、先生方も年2回、小学校や中学校を行き来して、互いの授業を参観するなどの取組をしている。

小学校の校長会には、キャリア教育を推進していく研究部会があり、校長がリーダーシップを発揮し、それぞれの意識の変化に関わるアンケートを実施している。キャリア教育について、「共通理解していますか」、「意識は高いですか」、「手ごたえを感じていますか」などの質問に対する数値は、年々上がってきており、各校長は手ごたえを感じていることが伺える。

反省としては、コロナの影響もあり、横の連携ができてなかったということが挙げられるため、今年度は、横の連携に関する研究をしていこうと考えている。まずは、校長自身が、ここにいる皆さんをはじめ、各関係機関がどのような取組をしているのかを知り、それを全校長に伝えていく必要があると考えている。

●清水委員 様々な取組を通じ、子どもたちはどんどん変わってきていると感じている。例えば、相模原市では全学校にChromebookが導入されており、今は、どの学校に行っても授業や様々な活動が、ICTなしには考えられないくらいの状況である。

中野中学校では、今年の1月29日には、AIを使った授業を公開し、全国各地から人が集まり、盛大な研究発表会となった。ある研究会において、「これからの時代は、AIを知っている人間と、AIを知らない人間に完全に分断される。」という話を聞いた。自分の所属する中学校で、生徒に対し、4月にアンケート調査を行ったところ、学校外でインターネットやスマートフォンを使っている時間が、平均4時間以上であることが分かった。子ども家庭庁の資料によれば、中学生は282分、小学生（10歳以上）も226分という、衝撃的な数であり、危機感を感じている。

現在、子どもたちが様々な取組を行い、「できた」、「感動した」という経験をしているが、経験からできるようになったことを定着させていかなければ、子どもたちのキャリアにはならないだろうと思う。「できる」を「理解する（わかる）」につなげることが大切である。キャリア発達を促す上では、生活習慣の確立や生活を自己管理することは、非常に重要だと考えており、この点に関しては、PTA連絡協議会に対しても協力を求めているところである。

- 中村委員 相模原市PTA連絡協議会では、自己肯定感を上げることをテーマに、様々な活動を行ってきた。子どもたちは学校だけでなく、学校と家庭と地域で、育てられていると考えており、まず家庭のしつけ等については、学校で教えることではないと考えている。各家庭においても、しっかりと教育をするということを確認しながらの取組であった。

相模原市は、約49,000人の子どもたちがいるが、そのうち、約1,800人が不登校であると聞いている。そのような中で、キャリア教育が、生きる力を育み、夢をもって前に進むための取組であると認識しており、このような理念に基づいた活動を昨年度行った。

昨年12月、PTA代表者会において、子どもの自己肯定感をアップさせることを目的とし、神奈川県教育委員会子ども教育支援課の方の話聞き、学ぶ機会を設けた。まずは、保護者が自己肯定感やそれを育むことについて理解することが大切だと考えている。

家庭教育事業においては、市内の11グループで様々な先生方に講演をいただいている。例えば、ヨガのインストラクターで世界チャンピオンの三輪さんや、地元出身のアナウンサー、ファザリングに関する講師などである。このような取組を通じ、つながりを作り、広げ、深めていくことをスローガンに掲げ、取組を進めているところである。

家庭での教育がとても大事であり、学校で学んだことを習慣化しなければ、力にならないという話を前回の会議でも聞き、その通りだと感じている。年に3回、PTAの代表者が集まる会議があり、その中では、現職の先生方と保護者の代表者がディスカッションをする取組をしている。スマホのスクリーンタイムが多いことについて、どのような影響があるのかということについて、先生方から話を聞くとともに保護者側の事情も先生にも聞いていただき、どのようにしていけばよいのかということも考えている。

- 農上委員 先ほどの自己管理能力の話題について、原先生のご意見、見解はいかがか。

- 原委員 今、議論している教育に係る内容は、本来、大学教育以降でやるべきことであり、それを小・中学校教育でやっていることのすばらしさを、改めて感じる。小学校、中学校に在籍する子どもは、「生徒」であり、本来、「生徒」とは、先生に従う徒弟制度にちなむ言葉であり、先生が生徒に教える、「君臨型」、「支配型」の教育がイメージされる言葉である。しかしながら、大学生に対しては、「学生」という言葉を、我々は用いる。これは生きる力を学ぶと解釈することができ、今ここで議論されていることは、正にこれに該当することから、この議論の内容自体がすばらしいと感じる。

自らが学ぶ力を育む方法の一つとして、我々が取り組んでいることの一つに「目標管理ミーティング」がある。A4、1枚のシートの一番上に、チームの年度の目標があり、次に月間目標がある。これらは、学生自身が話し合っていて決めており、チームの共通項である。それらを受け、個人が具体的にやるべき事項を目標として、概ね5項目程度、数字で落とし込めるものは数字で落とし込みながら、言葉で表現している。重要施策を自分の能力と照らし合わせて設定することが重要である。重要施策は1ヶ月に一度、1年生から4年生まで能力差関係なく、5、6人を1つのグループにまとめ、話し合いをするという文化を作り上げている。この話し合いにおいては、グループのメンバー間には能力差があっても、そのことをもって目標を否定しないことが大切である。自分の能力をきちんと把握した上で、そこから半歩先の目標をクリアすることで、それぞれがそれぞれの立ち位置よりも上がり、それを認め合うことが重要であり、それは正しくキャリア教育だと改めて感じる。

- 農上委員 これまで成果と課題について挙げていただいたが、2つ目のテーマである、本市のキャリア教育に期待することについて、皆様からご意見いただきたい。消費者教育に係る家庭教育と学校教育の関連について、いかがか。

- 菊地原委員 市民局の中に消費生活総合センターがある。ここでは、市民の方がインターネットで詐欺まがいのものを購入してしまったなどの消費のトラブルがあった際に相談にのる部署であり、専門の相談員が複数配置されている。

以前から、学校に出向いて出前講座を行っているが、近年、小中学生によくあるトラブルとしては、オンラインゲームにおける課金の問題やインターネット通販による問題が多いと把握しており、そのようなトラブルに合わないよう、未然防止をするということを目的に

している。子どもの頃からこのようなトラブルに合わない教育を受けることによって、大人になってからも投資のトラブルに合わないようにするための「自律する力」の育成につながると考えている。

□農上委員 青年会議所では、様々な事業を行っていただいているが、事業を通して生徒たちに感じていることはどのようなことか。

●山口委員 5月11日に小学5年生を対象にサッカー大会を開催した。この取組を通じて、相手への敬意や思いやりの心、フェア・プレーの精神を育んでもらうことがねらいであった。

思いやりの心が育まれるように、試合が終わった後にアフターマッチ・ミーティングを行い、相手を称え合う時間を作った。また、フェア・プレーの精神を学ぶブースをつくり、そこでクイズ形式で問題を出した。また、敬意や思いやりを感じる姿を見た時にグリーンカードを渡し、最終的にグリーンカードを多く集めた子に対し、トロフィーを手渡した。この取組は、保護者の方から好評であり、次年度以降もやってほしいという声があるが、単年度での取組となっているため、次年度以降の取組については、ご協力をいただける学校や他団体と相談をしたいと考えている。

□農上委員 アフターマッチ・ミーティングでは、プレーの後の時間を大切にしているということだが、そのような取組をする理由は何か。

●山口委員 相手への敬意や思いやりの心を育むことは、コミュニケーション能力の育成につながると考えている。さらに、コミュニケーションをとれる子どもたちを多く育むことは、より活発な地域を創ることもつながると考えている。また、小学5年生を対象としていることについては、下級生の子たちにも広げ、伝えてほしいという思いがある。

□農上委員 職場体験に関わるることについて、取組の成果と課題について、どなたかお話いただけるか。

●鎌倉委員 法人会の会員数は約3,300社ある。私たちがこのキャリア教育を通してできることの一つの大きなところは職場体験であり、どの程度の企業が参加できるか、参加してもらえるかということが重要だと考えている。

職場体験を受け入れてくれる会社の業種にはばらつきがあり、サービス業や製造業は非常に多いが、金融業と建設業については登録が少ない。その理由は、職場に子どもたちを迎え入れることの難しさにある。ただ、昨年、ある銀行に声かけ、一行に登録をしてもらうことができた。法人会の会報で、登録に向けた案内を出しているが、それだけではなかなかインパクトがなく、登録が増えない状況があるため、登録の少ない業種に対しては個別に面談を行いながら、登録を促していきたいと考えている。

□農上委員 同じく、職場体験に関することについて、岡本委員はいかがか。

●岡本委員 公共職業安定所では、中学生が職場体験に行く前のマナー講座を依頼されることがある。中学校においては、職場体験の事前学習、事後学習の内容をまとめて「見える化」するなど、様々な取組がされていると感じる。

中学生は、学校以外の外の世界の「会社」に関心はあるが、知らない世界でもあるため、怖いと感じることもあるようである。マナー講座の際には、「わからないことがあったら、どうするのですか。」といった質問を受けることがあり、「わからないことは質問して大丈夫ですよ。」と答えているが、そのようなやり取りをするときには、真剣な表情が見え、楽しみにしている様子もうかがえる。

会社にとって、中学生にけがをさせてはいけないことなどを考えると、職場体験で中学生を受け入れることは緊張を伴うことである。しかしながら、中学生の受け入れに伴い、会社内で相談をすることで、仕事に対するモチベーションが上がったといった話も聞いている。

建設業は、安全面への配慮が特に必要な業種であり、受け入れは大変なことだと思うが、

例えば、大きい建物を建てるにあたっては、このような仕事や工程があるのだということを知ってもらいきっかけにもなるため、ぜひ受け入れてもらいたい。

普段、学生から年配の方まで、様々な方の相談を受けているが、特に若年層の方の就職支援に関わる上で感じることは、世の中にはたくさんの仕事があることを早い時期に知ってもらいたいということである。その意味で、中学校の時の職場体験学習は、有意義な活動であると感じる。他にも、発達に課題のある児童生徒の保護者を対象としたセミナーを行っているが、保護者の方にも、子どもたちと同じ話を聞いてもらえる機会があるとよいと感じる。

□農上委員 岡本委員からは、職場体験とともに障害者の自立支援の話があった。「すべての児童生徒にキャリア教育を」という視点においては、障害者の自立支援自立促進の取組も大切だと思うが、村山委員の見解はいかがか。

●村山委員 社会福祉事業団は、松が丘園とけやき体育館を指定管理で運営している。障害のある方は、高校卒業後に色々な進路に進むが、その際、就労支援の相談を受けることがある。面談を通して感じることは、学齢期における教育や道徳が、将来に大きく関わっているのではないかということである。

家庭環境も影響すると思うが、面談の中では、相談者が学校教育の場での経験を話すことが多くある。精神障害のある方に関して、最初から精神障害があった方ばかりではなく、小中高では通常の学級で学校生活を送ることができていた方が、大学に入ってから、社会に出てから、ある出来事をきっかけに、苦しみを伴う経験の積み重ねで、精神的な障害を発症される方も多いように感じる。

相談に来た方の話の中に、「学校の中で経験が少なかった。」、「授業が全くわからなかった。」、「友人が少なく孤独だった。」などの振り返りをされる方がいる一方で、「あの先生の言葉にすごく助けられた。」、「先生があの時、親身に相談に乗ってくれた。」、「あの先生がいたから、僕の人生は変わった。」という話をされる方も多い。学齢期において様々なことを経験する上で、多少のことでは、へこたれない気持ちや強い精神力を持つことの大切さを、たくさんの相談事例から感じている。

□農上委員 職場体験について3名の委員から話を聞いたが、中学校の視点から見て、どのように感じているか。

●松尾委員 学校の中には、国語や数学などの勉強があるが、生徒に「なぜ、勉強するのか。」と問うと、「高校入試があるから。」や「今度、テストがあるから。」という言葉が返ってくることもある。また、「本当にあなたのためになっていると思うか。」と問うと、「あまり意味がないと思うが、仕方がない。」などの言葉が返ってくることもある。これは、教員にも課題、問題があると思っており、生徒に学ぶことの意義やすばらしさ、楽しさを伝えきることができていないのではないかと感じる。

職場体験においては、一生懸命生きている大人の後ろ姿を見ることができ、また、直に専門的な技術や仕事に対する様々な価値観などについて知る機会にもなっている。例えば、接客における言葉遣い一つをとっても、今の自分たちでは対応ができないことを知ることになる。そのような学びがあった後、学んだことを教科の授業を中心とした、学校の学びとどうつなげられるか、という点が大事なところだと思っている。職場体験を通じ、色々な職業や価値観に触れ、自分はどのような人間で、どういうところがあって、これならできそうだとか、あんなふうになってみたい、などの自己理解が進み、それがもとになって、勉強を頑張ろうという気持ちにつながると思う。

多くの皆さんが、中学生のためにここまでやっていただいているのか、ということを知り、本当にありがたいと思う。それを最大限活用できたらと感じる。

●清水委員 子どもたちが、職場体験を通じ、「できた」という体験を非常にたくさんさせていただいているのだということに対して感謝している。職場体験が終わった後の子どもの感想は、とてもすばらしく、「時間を守ることが大切だと感じた」、「自分から声をかけることが大切だ」など、貴重なものが多く見られる。学校がやらなければならないことは、それを

次にどう生かしていくか、ということである。つまり、「できた」を「わかった」に変える深い学びを実現するということであり、これが非常に重要である。「キャリア・パスポート」などを活用しながら、様々な経験をどのように次につなげていくのか、ということが次の学校の課題であり、やるべきことであると感ずる。

□農上委員 「キャリア教育に期待すること」について、いかがか。

●中村委員 保護者としての実体験をもとに話すと、子どもが25歳になるが、高校を卒業し、社会に出て稼ぎ、税金を納めるという立場になったときに、初めて本当の意味で自己分析をして、私は何をしたらいいのかを考えたのが高校3年生だったという実感をもったところである。高校卒業後や大学卒業後の進路選択等において、実は小学生、中学生のときの、この経験や体験がきっかけだったといったことがあるかもしれないと感ずる。高等学校PTA連絡協議会において、中学校と高校がうまく連携した取組ができたらという話をした。所管する教育委員会が異なるなど、様々な事情もあると思うが、柔軟な連携ができた方が、キャリア教育の充実という面では、よいのではないかと思う。

●沼田委員 分身ロボット「OriHime」をあじさい会館の1階に設置している。障害のある方が、自宅にいながら遠隔で操作することができ、売店における接客ができるものとなっている。神奈川県取組で、3年目になる今年、相模原市で活用できることになった。このロボットを学校に出張させることで、ロボットを介して児童生徒と障害のある方の交流ができるので、機会があれば活用していただきたい。

●千葉委員 子どもアントレプレナー体験事業では、商品の販売企画や資金調達、仕入れなどを疑似体験して、8月の夏休みに市内商業施設において、実際に商品を販売するという取組を行っている。この事業に大学生が関わっているが、6月からコーチングの研修を受けたり、市内の中小企業の経営者の方から経営のことを学んだりしながら準備を進めている。昨年度、買い物をする立場で様子を見に行ったが、子どもたちは自分たちが企画して作った商品をお客さんに買ってもらうために、様々な役割分担を考えていた。例えば、お金を管理する人、プレゼンをして商品を売り込む人などである。

このような経験を通じ、どのような仕組みで商品が売られているのかなど、それまでとは全く異なる視点で物事を見ることができるようになったり、企画する力が身に付いたり、人と接することが好きだということに気付いたりするなど、自分の得意なことや好きなことを学ぶ機会につながっていると感ずる。

□農上委員 市内において、学校の教育活動だけでなく、様々なところで、子どもたちに関わる取り組みがされているということを知ることができた。委員の皆様から聞いた取組の成果と課題、また、キャリア教育に期待することについては、自己管理能力、AI、キャリア教育に関わる方の学びなど、様々な話を聞くことができた。原先生、藤田先生にご助言をお願いする。

●原委員 目標管理ミーティングについて、先ほど話したことに補足する。目標シートにして、翌月それをフォローしていく振り返りシートを作成しており、「目標→振り返り→目標→振り返り」を繰り返している。振り返りを行う際の考え方について、従来の日本教育は「フィードバック」、つまり、ダメなところを探し出し、その点を改善していくという考え方だったと感ずる。私は「フィードフォワード」という思考で物事を捉えている。定義すると、「フィードバック」とは「相手の行動に対して、改善点や評価を伝えて、軌道修正を促すこと」、フィードフォワードとは「未来完了形の自己改革を目的としたアイデアを、周囲の人（様々な立場の人）から集めて、色々な物事に取り組むこと」である。

「フィードバック」は、誤りや欠点を伝えて対応を考え、優位に立つ人が批判し、その人固有の問題として、その問題を捉える思考であるが、「フィードフォワード」は、将来実践可能なアイデアを皆がそれぞれの立場で出し合い、問題点を探るのではなく、解決策を探っ

ていこうという思考である。その人固有の問題として捉えるのではなく、組織全体の問題として捉え、より良い方向へ結びつけていこうという視点、話し合いの文化を青山学院大学の陸上競技部では、根底に置いて活動している。

そのような視点で考えれば、キャリア教育は、まさしく「フィードフォワード方式」であり、「皆で物語を作っていこう」、「色々な立場の方々からの意見を得ながら進めていこう」という視点は、非常にすばらしい教育活動だと感じた。

私が担当する講義には、50名ほどの学生がいるが、これまでに「強み」を評価される教育を受けた経験があると答える学生は50%程度、40%強であり、「よさ」や「強み」を引き上げてくれる教育者になかなか出会ってこない現状にある。相模原市は、よい教育をされていると感じる。最近の学生を見ると、当たり前前の回答を記述することは、わりとできるが、レポートを書かせたり、あるいはディベートをさせたりすると、なぜかトーンが下がる傾向にある。暗記型教育を否定するつもりはないが、相模原市のように、様々な視点で、皆で話し合う文化は、大切だと思う。この視点で教育を受けた生徒が間もなく大学に入ってくることになることについて、我々受け入れる側は、わくわくしている。

一方で、基礎教育はやった、定着した上で、このキャリア教育である。英国数理社、基本的な学びは、教えるべき時に教えていかなければならないと考えている。キャリア教育のみが行き過ぎ、基礎教育がおろそかになることだけは、絶対ないようにしていただきたい。義務教育における基礎教育とキャリア教育のバランスは大切にしてほしい。

私も実践をしており、学生にも求めていることとして、3つで考える思考がある。例えば、私自身が行っているのは、「経済」、「スポーツ」、「文化」、「芸能」など何でもよいが、ニュースを読む。そのニュースを自分ごととして捉え、問題点を一つ書き出す。問題点を指摘することは誰でもできるが、次に対策案を3つ考えることをしている。それらをもっと掘り下げようとすると、データ等が必要であればインターネットなどを使って調べる。このように、3つで考える思考を常に作れば、社会が徐々に分かるようになってくる。

他にも、テレビショッピングの販売者のつもりになって、「この水の入ったペットボトルの商品を、目の前にいない相手に対して、どのようにコマーシャルすればよいかを考え、1分間で話しなさい。」といったワークショップを行う。相手には、商品が見えていないことが前提となるため、言葉が必要である。また、1分間という時間を設定することで、情報をまとめる力や、話の中に起承転結を盛り込むといった力も必要になる。このようなワークショップを日々、行っている。

このような学びをより豊かなものにするためには、言葉や基本的な学力が身に付いていることが大前提となる。基本的な学力とキャリア教育を通じて身に付ける力とのバランスが大切だということである。

- 藤田委員 以前の会議でも申し上げたことだが、これだけの皆様方が集まり、この会議が始まる前には、本村市長もいらっしゃるなど、市を挙げて、キャリア教育の推進に取り組んでいるのは、ものすごく大きなことだと感じる。長年にわたり、この取組が進められていることで、全国的にも相模原市の注目は高まっているのではないかと、改めて感じた。

取組の成果について、胸を張れる成果が出ていることが、資料からわかる。「自分には良いところがあると思う児童生徒の割合」が76.1%（策定時）から82.7%（R5年 4月調査）、「将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合」が76.7%（策定時）から77.3%（R5年 4月調査）となっており、これは全国の自治体と比べると、めざましい伸びだと思われる。

大規模自治体に顕著に表れる傾向であるが、コロナの関係で、自己効力感や自己肯定感を大きく下げた自治体が多い。そのような状況を加味すれば、グラフは、「低迷」ではなく、「着実な伸び」という見方をしてよいと思う。相模原の先生方や地域の方々、皆様が、子どものキャリア形成を支えてくださっていることがよくわかる。それを証明できるのが、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。」という質問において、伸びを示すグラフである。長所をきちんと把握して、指導してくれる先生方が、増えていっている。こういった面は、全国に胸を張り、示していただくべき、大きな成果であると感じた。

先ほど佐藤校長先生から、音楽の授業を通して、キャリア教育をするという話があった

が、これも非常に重要なポイントだと思われる。音楽が、キャリア教育に近いという理解は、それほど多くの先生方がされていないかもしれないが、例えば、小学生が二部合唱を、中学生が三部合唱をする時に、相手の声を聞きながら、自分の立場や役割を果たしていく点においては、音楽がまさにキャリア教育につながるどころであり、そのような認識をきちんとされているところが素晴らしい。

また、山口委員が言っていたが、スポーツとフェア・プレーの関係も非常に意識されており、フェア・プレーをする中で、相手のよさを考えることなど、学校の内外で、キャリア教育を進めているということが、このような素晴らしい成果に結びついたのでないかと思う。

今後の課題として、令和6年度の重点について、「アウトカム評価にあるPDCAサイクルの推進」と、「中学校区や地域関係機関との連携」という2点が挙げられているが、この2点は両者一体、裏表と言うべき関係であると思う。

先ほど松尾校長先生から、キャリア教育の4つの力（基礎的・汎用的能力）については、浸透してきているという話があった。今後はさらに進んで、例えば、「つながる力の中で、うちは何々する時に何々することができることだよな。」というように、多くの先生方や子どもたちの共通のキーワードや合言葉になっていくとよいと感じる。

先ほど原先生がおっしゃった目標管理ミーティングは、まさにPDCAサイクルだと思うが、「フィードバック」のみならず、「フィードフォワード」の視点が重要だというお話をしてくださった。それを実現するためには、どこを目指しているのか、何を成したいのかということが、具体的な言葉で目標に落とし込まれているということが重要であり、その具体的な目標を、学校内の子どもたち、PTAの関係者とともに合言葉にしていくことが重要であると思う。

先ほど、岡本委員が、職場体験を受け入れるときに、各企業では、どのように受け入れたらよいかを相談するという話をしてくださった。その相談の中で、こういう力をつけるためには、うちではどういうことができるか、つまり、「『何々する時に何々することができる』が、今回、子どもたちの目標であるなら、その力をつけるために、うちはどのようなプログラムがこの3日間に組めるかな。」といった議論を、各受け入れ企業の中で行っていただくことにより、Win-Winの関係になると思う。職場と学校が同じ目標を共有すればこそ、職場でできたことをさらに学校で受け取り、様々な場で、引き継いでいくことができる。

PDCAサイクルを具体化するためには、具体的な目標を、いかに市内の各学校で言語化し、定着させていくのか、ということが重要な課題であると思う。その上で、子どもたちが自分たちの成長や気づきを記録に残した「キャリア・パスポート」の活用を、ぜひ進めたい。先ほど、中村委員からもあったが、小中だけではなく、高校までをつなぐ意識が大切であり、小中高をつなぐ重要なツールとして、「キャリア・パスポート」がある。重点①の③にある「指導と評価が一体となった手応えのあるキャリア教育の推進」の中に、「キャリア・パスポート」の活用も柱の一つとして意識化することも重要ではないか。

#### 4 その他

次回の日程は、1月24日の実施予定。

#### 5 閉会

## 令和6年度相模原市キャリア教育推進委員名簿

氏 名	所 属 役 職 等	出欠席
藤田 晃之	筑波大学人間系 教授	出席
原 晋	青山学院大学地球社会共生学部 教授	出席
村山 毅	相模原市社会福祉事業団	出席
布施 昭愛	相模原商工会議所	欠席
鎌倉 慎一郎	公益社団法人 相模原法人会	出席
山口 堅一郎	公益社団法人 相模原青年会議所	出席
岡本 愛子	相模原公共職業安定所	出席
中村 岳彦	相模原市PTA連絡協議会	出席
佐藤 俊巳	相模原市立小学校長会	出席
松尾 英和	相模原市立中学校長会	出席
清水 俊次	相模原市立中学校長会	出席
農上 勝也	学校教育部長	出席
菊地原 央	区政推進課長	出席
沼田 好明	高齢・障害者福祉課長	出席
馬渡 加能	こども・若者政策課長	出席
草薙 格	産業支援・雇用対策課長	出席
千葉 恵子	創業支援・企業誘致推進課長	出席
沖本 健二	教育総務室長	出席
三谷 将史	学校教育課長	出席
奥津 光郎	教育センター所長	出席
松本 隆人	生涯学習課長	出席